毎日新聞（夕刊）

昭和49年（1974年）2月1日（金曜日）

一枚の絵がもたらすカタルシス

二紀福岡展

今年の二紀展にギクリとさせられる一枚の絵が並んでいた。「予知」（福岡・滝純一）と題する奇怪な絵である。やわらかい筆で画面に描かれた幻想絵画だが、最近流行の硬のはいっていない幻想風とは違う。頭脳ばかりが成長したような耳なし人間が暗い空間に閉じ込められて揺かれ、ずり寄せるようにして異様の表から伝わってくるかすかな音に息をこらしている。音の出どころはバッタの羽音である。しかし、このグロテスクな男にとって、耳はすでに肉体からバラバラに分離してしまって一向に役立ってはいない。

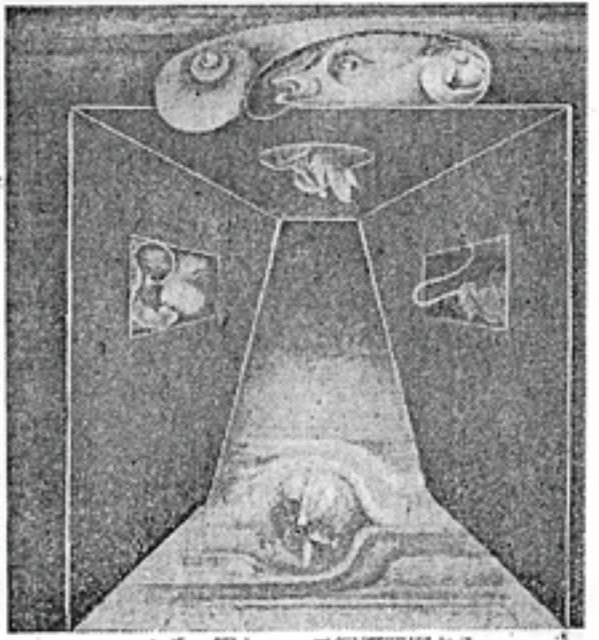
この絵は世界のひとつの破局を象徴しているように思われる。聴こえてくる単なる物理的な音に対してすら、我々の日常は鈍感になり、いつも受身のような気がしてくる。まして、バッタの羽音のようなかすかな音……。

歴然とした世の中になってきた。石油問題、物価問題ひとつとっても、感覚やカラクリが張りめぐらされる。それに対して我々の視力や臭覚はどうだろう。そしてさまざまなカラクリや舌先三寸の口上を見抜く想像力は？

この作家が、果たして時代の破局を意識して描いたかどうかはわからない。けれども、危機をあばく表現行為によって未来へ向けてのカタルシスを内包しているのは確かのようだ。

一枚の絵がもたらすカタルシスを鎮静剤に、会場を一巡するいくつかの新鮮な絵につき当たる。

単純な点描作業から古代の有明海を想起させる北原悠二郎（柳川）の「馬台風（油）」、雪国の厳しい生活の中に生きつづけた長谷芸能を描く三輪勇夕助（東京）の「"北風"の彩色」、土谷人間の病と快楽を描く友添康典（筑後）の「青刈シリーズ、花と精と海」など。これに松村三之（福岡）、依国昭（田川）らを加えると、明治以来の受売り西洋画から"日本人の絵画"つくりへの胎動が、大きな波をなしてはじまっていることがうかがえる。ほかに絵画、彫刻合わせて百十点（3日まで、福岡県文化会館）【幸】



「予知」……二紀福岡展から